



## 書評

竹本和彦著

『海外環境開発協力の歩みと展望』（環境新聞社）

ジャーナリスト／OECC 理事 河野 博子

この本の真髄は、英語表記によるタイトルに圧縮されている。

International Cooperation on Environment and Development: Progress and Future Perspective

いまなお相克関係にある環境と開発、それをめぐる国際協力が主題である。重いテーマだ。

本は「世界銀行における経験」から入っている。

第一章にあるように、1989年当時、世界銀行は環境NGOや途上国の住民から厳しい批判にさらされており、変貌の途上にあった。著者が所属したアジア技術局の環境社会課の職員は赴任当初14人だったが、日本に帰る1992年6月末には36人と急拡大したという。日本の環境庁でも1989年当時の国際課という小さな組織がその後地球環境部に、2001年に環境省地球環境局となった。

1980年代後半に世界中で喫緊の課題として急浮上した地球環境問題。この本は、最前線での著者の歩みを通し、その全体の構造や細部がわかる仕組みになっている。一般向けの入門解説書として役立ちそうだ。環境国際協力の分野は、専門用語やアルファベットの略語が多いが、普通の言葉でひとつひとつ説明が記され、わかりやすい。

例えば、1997年12月の京都会議（正式名称は気候変動枠組み条約第3回締約国会議、略称COP3）について。議長役の大木浩環境大臣の補佐官を務めた著者により明かされる裏話は貴重で興味深い。この分野をめぐる文書や会話によく出てくる用語の解説もある。ベルリンマンデート、AIMモデル、パッケージ・ディール、ポイント・オブ・オーダなど。

もっと言うと、国際会議を新聞記者として取材した私の小さな疑問も解消した。第4章第4節「OECDと日本」に「環境委員会では、議長及び副議長（複数名）により役員会（ビューロー）が構成されており、」と書かれている。ビューローとは日本語だと何なのかわからなかったが、「なんだ、そうなのか」とすっきりした。

本の最後をしめくくるのは、資料編。海外環境協力センター（OECC）の初代理事長であり、2008年に83歳で逝去した橋本道夫氏との出会いについて書かれ、氏の著作「私史環境行政」の抜粋と解説が続いている。橋本道夫氏は厚生省の初代公害課長を6年余にわたって務めた伝説の公害行政官。医師であり、環境庁大気保全局長を最後に退官した。

地球サミット開催に先立ち、1987年に打ち出された「持続可能な開発」という概念についての橋本氏の文章が取り上げられている。「確かにこれこそ今後の我が国にとって、国際社会にとって、世界にとって、地球家族にとって、本質的な求められる政策である。しかし言うはやすく、行うは難し。」

橋本氏の文章を引用する形で著者は何を訴えているのか。行政だけでなく、研究者、企業、NGO、市民がくこの難題に覚悟をもって取り組まなければならない>ということではないか。

全体を通して、こども、若者、働き盛りの人々へのメッセージがあふれている。著者の人生の歩みから学ぶべきは、「へこたれない」と、「よく遊ぶ」ことの大事さだと思う。

著者は最初から、英語が堪能でコミュニケーション能力に秀でた国際行政マンであったわけではない。1977年の初めての海外出張、翌年のハワイ・東西センターでのエピソードが綴られる。「日本社会の真ただ中であって、『肩書』という恐ろしい『かさぶた』に覆われ、意識のあるなしにかかわらず、こうした社会的関係が独り歩きしていく世界にどっぷりと浸かっていたところから、いきなりハワイの地に一人ぼつんと放り出された自分」を振り返り、どう変わっていったのかを説明している。

若い世代に対し、著者は「国際的文脈の中で物事を自分自身で考えていく訓練」を勧める。同時に、様々な人々との出会いや遊びを通して人間力を広げたプロセスが活写され、楽しいガイドダンスとなっている。



本書籍の購入に関する問い合わせは、OECC 広報担当 outreach@oecc.or.jp 宛にご連絡ください。